

令和元年6月24日現在

機関番号：17301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16H03400

研究課題名(和文) ナチス時代のスイスと精神的国土防衛 「順応と抵抗」をめぐる文化の政治を軸に

研究課題名(英文) Switzerland during the Nazi era and the spiritual national defence: politics of culture as to "adaptation or resistance"

研究代表者

葉柳 和則 (HAYANAGI, Kazunori)

長崎大学・多文化社会学部・教授

研究者番号：70332856

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,400,000円

研究成果の概要(和文)：ナチス時代のスイスは、二つの文化政策の影響下にあった。一つはナチスによる強制的画一化政策である。これは、スイスにとっても文化的圧力となった。もう一つはこの文化政策に対抗して生まれた、スイス独自の文化政策「精神的国土防衛」である。これはドイツとスイスとの文化的差異を強調することを目指した。チューリヒ劇場は、当初は精神的国土防衛にとって批判の対象であった。しかし、この劇場は、1938-39年のシーズン以降、精神的国土防衛の枠組みをスイスにおける「多様性の中の統一」という視点から再解釈し、寓意劇の時事劇的上演を行い、精神的国土防衛に順応し、同時にナチスを批判するためのドラマトゥルギーを生み出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、定型的に論じられてきたスイスの精神的国土防衛と演劇・映画との関係を、具体的に明らかにすることにある。その結果、これまで一種の国民的神話となっていたナチス時代のスイスの文化史叙述を脱構築するための基本枠組みを提示しえた。さらに、スイスと他のドイツ語圏の芸術の相互作用についての理解を深めることにつながった。すなわち、精神的国土防衛というこれまでスイス以外ではほとんど知られていなかった文化運動や具体的な演劇や映画的实践を探求することは、スイスにおける文化と政治の歴史の書き換えにとどまることなく、国民国家の文化的アイデンティティという広範な問題圏において社会的意義を有している。

研究成果の概要(英文)：Switzerland in the Nazi era was under the influence of two cultural policies. One is the co-ordination policy by the Nazis. This has also brought cultural pressure to Switzerland. The other is Switzerland's unique cultural policy "spiritual national defense", which was created in opposition to Nazis' cultural policy. This aimed to emphasize the cultural differences between Germany and Switzerland. The Zurich theater was initially the object of criticism for "spiritual national defense" However, this theater reinterpreted the framework of "spiritual national defense" from the perspective of "unity in diversity" in Switzerland since the 1938-39 season, gave the performance of the parable plays, in order to adapt to "spiritual national defense" and, at the same time, to produce a dramaturgy to criticize the Nazis.

研究分野：ドイツ語圏文化、演劇学、文化社会学

キーワード：演劇 文化政策 ナチス スイス 歴史 国民国家

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

平成 25 年度から 27 年度に科学研究費補助金の交付を受け、スイスのチューリヒ劇場のプログラムと主要作品の分析によって、精神的国土防衛が上演作品の選定に及ぼす影響を詳細に確認するという課題が認識された。さらに、プレヒトやデュレンマットとスイスの劇場との関係への着目は、チューリヒ劇場の唯一性を強調する傾向にある現在の文学史記述を相対化し、バーゼル、クールといった他の都市の劇場における順応と抵抗の諸相を解明することの重要性の確認につながった。同時に、ナチス時代の精神的国土防衛がナチスのプロパガンダ政策に対する順応と抵抗としてあった以上、演劇のような相対的に限定された市民層を観客とするジャンルだけではなく、ラジオ放送劇、映画といった大衆的な文化メディアをも視野に入れる必要が明らかになった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ナチスの全体主義的プロパガンダに直面した 1930-40 年代のスイスにおいて、国民統合を維持し、強化するために推進された愛国的文化運動「精神的国土防衛(Geistige Landesverteidigung)」の文化史的意義を明らかにすることである。この運動において、ドイツに対する「順応」と「抵抗」は必ずしも相互排他的なものではなく、時に補完し合うものであった。とりわけドイツ語圏スイスは、「よりよきドイツ」、「別なるドイツ」と自己規定し、ナショナル・アイデンティティの核にある「スイス的なもの」の根拠を、ナチスの「強制的同一化」政策からドイツ文化のみならず西欧文化全体をも保護し継承することの中に見出していく。このプロセスを、同時代の演劇、ラジオ放送劇、映画の具体的分析を通して解明する。

3. 研究の方法

本研究グループは、研究代表者(葉柳)、研究分担者(市川、増本、中村)の4名から成り、(1)スイスとドイツでのアーカイブおよびインタビュー調査、(2)Web を利用した資料・データの共有、(3)研究会での討議、(4)成果の学会・シンポジウム・学術誌での公表が研究計画の柱となる。

一次資料の主要部分は未公開のアーカイブ資料や関係者のインタビュー記録であり、公開されている資料も日本では入手困難なものが多い。そのため平成 28 年度の前半に現有資料の検討、および調査先との連絡調整を完了した後、長期休暇期間中にスイスおよびドイツで調査を行い、講義期間中は大阪、名古屋で研究会を開催するというスタイルが基本となる。

最終的な成果は、研究期間終了後、一貫した視角から編集した論文集を出版することで、より広い読者層にアクセス可能な形で公開する。

4. 研究成果

「ナチス時代のドイツ語圏における唯一の自由の砦」、「第二次大戦期のプレヒト作品の初演」、「フリッシュとデュレンマットの輝かしい成功」。チューリヒ劇場の歴史は、数多の伝説とともに語られ、スイスの国民的記憶の一部を形作ってきた。しかし、これらの伝説は、この劇場に関する言説の定型化を生み出し、その背景や内実が十分に問われることのないままに、文学史叙述の中に登録されることにもつながっている。

チューリヒ劇場の歴史に関する研究もまた、多かれ少なかれ劇場の伝説化に影響を及ぼしてきた。Curt Riess の *Das Schauspielhaus Zürich* (1963) がその典型であるが、ナチス時代に亡命を経験した知識人がチューリヒ劇場の通史を執筆することで、その叙述は彼らの個人史と不可分なものとなってしまふ。こうした傾向は、Ute Kröger と Peter Exinger 編著の *In welchen Zeiten leben wir* (1998) の出版を境にして背景に退いていく。1990 年代末に、第二次世界大戦中のスイスの「克服されざる過去」についての、大規模な実証研究が国家プロジェクトとして実施されて以降、スイス史における脱神話化の傾向が顕著になった。文学史叙述においても、たとえば Ursula Amrein の *Los von Berlin* (2004) は、綿密なアーカイブ調査に基づいて、チューリヒ劇場の歴史の書き換えを試みている。

しかし、1990 年代以降のチューリヒ劇場研究は、歴史環境との関係に力点を置いているがゆえに、上演された戯曲を詳細に分析するという姿勢に乏しくなる傾向がある。研究代表者らが平成 25 年度から 27 年度に遂行した上記科研費に基づく研究「20 世紀スイスの国民統合と文化の政治 - チューリヒ劇場をめぐる諸言説を手がかりに」、およびその成果をまとめた著書『チューリヒ劇場と文化の政治』(2016) もまた、スイスの愛国的文化運動、「精神的国土防衛」との関係においてチューリヒ劇場の歴史を描き出す試みにとどまっており、そこで見出された知見を個々の戯曲に立ち戻って検証するには至っていない。

以上の経緯を踏まえ、本研究では、『チューリヒ劇場と文化の政治』の中で提示した、時事劇と寓意劇という二つの戯曲形式の関係性が、劇場の外部の歴史・社会的要因が作り出す布置の中で変容する過程を、個々の戯曲に焦点を当てて解明した。具体的には、チューリヒ劇場の歴史のうち、チューリヒ劇場の基本スタイルが生まれ、定着していく時代、すなわちドイツからの亡命知識人を劇場に受け入れたフェルディナント・リーザーがオーナーにして総監督であった時代(リーザー時代、1933-1938)、アメリカに亡命したリーザーの後を継いでオスカー・ヴェルターリンが総監督を務めた時代(ヴェルターリン時代、前期 1938-1945、後期 1945-1961)を取り上げ、それぞれの時代の代表的戯曲の内部構造とその歴史・社会的意義を確認した。

研究成果は、個別に学術論文として公表されたものに加えて、2018年9月に日本独文学会秋季研究発表会においてシンポジウムを開催し、そこでの議論を踏まえて、著書を出版する予定であった。しかし、同学会でのシンポジウムが、台風のため中止になり、2019年6月8日に延期された。以下、研究成果をチューリヒ劇場の文化史という本研究の性格、および、今後の出版計画との関連で、劇場の歴史を軸に説明する。

(1) Los von Berlin? チューリヒ劇場とベルリン演劇

フェルディナント・リーザーが総監督だった1933年から38年におけるチューリヒ劇場について調査を行った。1920年代のベルリンで、ピスカートアやイエスナーのもとで仕事をしてきたリントベルクやシュテッケル等の演劇人は、ヒトラーの政権獲得後、亡命を余儀なくされる。リーザーは彼らをスカウトし、「亡命者・ユダヤ人・マルクス主義者」劇場が形成された。チューリヒでは、精神的国土防衛との関連でベルリンに対する敵対像のようなものがあった。ベルリン演劇が持っていたモダニズムがどのように移植され、独自の光を放ったのか、先行研究(Mittenzwei: Das Zürcher Schauspielhaus 1933-1945、Amrein: Los von Berlin!)を補う形で、「ベルリンからの解放」について検討した。

チューリヒ劇場は1933、34年に、ユダヤ人問題をテーマにした二つの時事劇、ブルックナーの『人種』とF. ヴォルフの『マンハイム教授』(原題『マムロック教授』)を上演した。作品や上演を分析し、上演をめぐるファシスト(国民戦線)との騒動に言及する。更にデンマーク亡命中のブレヒトがチューリヒ劇場に売り込んだとされる寓意劇『まる頭ととんがり頭』(1933/38)や、当劇場初演のフリッシュの『アンドラ』(1957/61)を考察し、時事劇と寓意劇のあいだを探った。

これまで、「ユダヤ系のワイン商人」という定型的説明によって片付けられていた、リーザーの果たした役割とその限界について解明することで従来のチューリヒ劇場研究における空白を埋めることができた。また、リーザー時代のチューリヒ劇場における、反ナチス的時事劇、および寓意劇の時事劇的上演、古典劇の寓意劇的上演といった、その後のチューリヒ劇場、ひいてはドイツ語圏演劇における枠組みの一つの出発点がこの時代のチューリヒ劇場にあることを明らかにした。

(2) 『月は沈みぬ』 チューリヒ上演のインパクト ドイツ語版台本を手がかりに

ジョン・シュタインベックの戯曲『月は沈みぬ』(1942、ドイツ語版:1943)は、軍事的大国による北方の小国の占領とそれに対するレジスタンスをテーマにした寓意劇である。この作品は第二次世界大戦期のチューリヒ劇場において最多の上演回数を記録した。ナチス・ドイツによる占領の可能性を意識し続けてきたスイスにおいて、この上演が持っていた文化史的意味を解明することは、チューリヒ劇場研究の課題たりえる。しかし、Werner MittenzweiのDas Zürcher Schauspielhaus 1933-1945(1979)を唯一の例外として、この戯曲はほとんど研究されていない。アダプテーション研究の手法が確立されるまで、翻訳や翻案の研究は文学研究、文化研究において二次的な位置にとどまってきたことが、この集合的忘却の背景にある。この戯曲のドイツ語訳が出版されなかったことも忘却の理由の一つである。

本研究は、アーカイブ調査によって確認した1943年当時の上演用シナリオに基づいて、この戯曲の歴史的・文化的位置を探り、結論として、『月は沈みぬ』は、寓意劇/時事劇という視点から見たとき、ヴェルターリン時代のチューリヒ劇場のドラマトウルギーと親和性を持つこと、この作品を構成する諸要素は、戦後のチューリヒ劇場で上演されたフリッシュやデュレンマットの作品の特質を先取りしていたことを確認した。

外国語で書かれた戯曲の翻訳について研究は、従来、周縁化されていた。シュタインベックの『月は沈みぬ』の場合、作品内に登場する(ドイツと目される国の)軍人たちを、人間的感情と知性を持った人間、しかし、組織の中では抑圧者、迫害者として振る舞ってしまう存在として描いたために、とりわけ冷戦期のアメリカにおいては「拙劣なプロパガンダ作品」として貶価されていた。本研究は、チューリヒ劇場が遂行したナチス批判の文脈にこの戯曲を置くことによって、この戯曲の文化史的な位置づけを再評価しただけではなく、翻訳物の戯曲の上演を評価するための新しい枠組みを提示した。

(3) アルカディアとしてのスイス

長らくシラーは、「自由」の思想家であると同時に「一つの国民」という思想を代表する象徴的存在だった。ナチスに至るまで、また戦後もさまざまな陣営がシラーを自分たちのイデオログとして利用した。そのシラーの作品の中でも最も頻繁に上演されたのが『ヴィルヘルム・テル』である。それはドイツ国内においても、またナチス政権に脅威を感じるスイスにおいても、「一つの国民」を謳う愛国的な装置として利用されたのである。こうした動きに区切りを付けたのは、デュレンマットのシラー演説である。曰く、「政治によって自由は実現されない、少なくとも部分的にしか実現されない」と。

ドイツ語圏スイスは初期啓蒙主義以来、ドイツにとって「もう一つのドイツ」であり続けたが、戦後になるとスイスは、ナチス時代には「自由の砦」だったという自国像を創り出す。それはスイスという国の「中立性」を示してもいて、「精神的国土防衛」運動における架空の「国土」とも照応し合う。フリッシュの『学校版ヴィルヘルム・テル』は、このような「自由発祥

の地」であり、その住人であるというスイス（人）像を解体する試みである。こうした「アルカディアとしてのスイス」を、スイス内部の発言から検証した。

第二次世界大戦期のチューリヒ劇場においてスイスの国民的戯曲となった『ヴィルヘルム・テル』を、18世紀から20世紀までのドイツ語圏における受容史に置き直し、スイスのナショナル・アイデンティティ構築の動きが、ナチスの文化政策に対する批判としての『テル』上演から、戦後におけるスイスの中立性神話の政治利用という現象と繋がっていたことを明らかにした。とりわけ戦後における、フリッシュとデュレンマットによる「アルカディアとしてのスイス」の脱構築の試みが、スイスのアイデンティティ・ポリティクスに根本的な反省を迫るものであることを示した。

(4) 寓意劇としての『聖書に曰く』 ヴェルターリン時代のデュレンマット

デュレンマットの劇作家としてのデビュー作『聖書に曰く』(1947)を初演当時の文脈に置いた場合、この戯曲が第三帝国とスイスという二重の寓意性をもつものとして解釈できることを明らかにした。

まだ無名だったデュレンマットがチューリヒ劇場でデビューするという幸運に恵まれたのは、当時のスイス文学界・演劇界の「スイス化」の動きなしにはあり得なかった。第二次世界大戦中にはチューリヒにベルリンの演劇が持ち込まれ、チューリヒ劇場が反ファシズム亡命作家の砦となったのに対し、戦後はスイスの若い才能を発掘し、世に送り出そうという動きが顕著になった。

『聖書に曰く』は16世紀にドイツ北西部の都市ミュンスターに出現した再洗礼派王国を題材にしており、集団の狂気を問題にしている点でヒトラーの第三帝国の興亡を描いた寓意劇と解釈することができるが、初演における演出のために、精神的国土防衛によって守られるべき「スイス的なもの」を格下げする作品ともなった。つまり、再洗礼派王国の王（ヒトラーと二重写しになっている）の食べ物にされたミュンスター市長を、当時、ヴィルヘルム・テルを演じるならこの人と言われたスイスの国民的俳優ハインリヒ・グレートラーが演じたために、チューリヒの観客は「スイス的なもの」が貶められたと感じたのである。その結果、第三帝国の寓意であったはずの『聖書に曰く』は、スイスの寓意ともなった。

第二次世界大戦期のチューリヒ劇場が「順応と抵抗」の様式としての寓意劇の時事劇的解釈を必要としていたのに対し、戦後、ナチスによるスイスへの攻撃という条件が失われたとき、寓意劇は、別様の意味を帯びようになる。それは、イデオロギー批判のための文化装置としての寓意劇である。しかし、戦後直後の『聖書に曰く』上演では、観客は第二次世界大戦期の解釈モデルによって作品を理解しようとした。その意味で、この戯曲は、戦中のドラマトゥルギーと戦後のドラマトゥルギーの間を画する作品であった。ドラマトゥルギーの変容という視点から、ドイツ語圏の文化史を検討する試みは従来行われておらず、本研究はそのための一つの土台を提供している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計12件)

- 市川明、萩原健『演出家ピスカートアの仕事 ドキュメンタリー演劇の源流』、演劇学論集、査読有、第67号、2019、214-220、DOI:10.18935/jjstr.67.0_214
- 市川明、一人芝居『肝っ玉おっ母とその子どもたち』の試み、Arts and Media、査読有、第8号、2018、136-163、<http://shop.matsumotokobo.com/?pid=133997447>
- 市川明、『アンドラ』への眼差し フリッシュを読み解く、「追悼 越部進先生 ドイツ演劇・文学研究」、査読有、第1号、2018、87-114、URLなし
- 増本浩子、記憶の場としてのリュトリ 文学作品によるアルプスの神話化と脱神話化、DA、査読有、第13号、2018、77-89、<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/repository/81011281.pdf>
- 葉柳和則、スイスのラジオ戦争 ウィークリーニュース「世界クロニクル」のテキストとコンテクスト、独文学報、大阪大学ドイツ文学会、査読有、第34号、2018、29-51、<https://iss.ndl.go.jp/books/R000000004-I029424667-00>
- 葉柳和則、中立のディスカール 第二次大戦期スイスのラジオ・ニュース「世界クロニクル」の政治・文化的位置、多文化社会研究、査読有、第4号、2018、287-304、<http://hdl.handle.net/10069/38011>
- 葉柳和則、テキストとしての「文化教書」(1938) ナチス時代のスイスにおける「精神的国土防衛」運動の理路、インターカルチュラル、査読有、第16号、2018、99-114、<https://ci.nii.ac.jp/naid/40021619393>
- 中村靖子、共感し推論し予測する機械 ニュートン以後、フロイト、そしてそののち、名古屋大学人文学研究論集、名古屋大学人文学研究科、査読無、第1号、2018、73-97、DOI:10.18999/jouhunu.1.73
- 市川明、寓意劇『アルトゥロ・ウイの興隆』について、Arts and Media、査読有、第7号、2017、84-107、<http://shop.matsumotokobo.com/?pid=120957175>
- 市川明、レッスングの『賢者ナータン』について、Arts and Media、査読有、第6号、2016、6-27、<http://shop.matsumotokobo.com/?pid=105540206>

〔学会発表〕(計 11 件)

市川明、転換期演劇 (Wendetheater) が問いかけるもの ハイナー・ミュラーの『ハムレットマシーン』を中心に、シンポジウム「東ドイツ再考—政治と文化の力学」、阪神ドイツ文学会第 227 回研究発表会、2018

葉柳和則、スイスのラジオ戦争 J・R フォン・ザーリスのニュース番組「世界クロニクル」を軸に、日本国際文化学会、2018

Hiroko Masumoto、Multicultural Artistic Life in Switzerland during the World War I, Cross-Cultural Studies: Emic-Etic Correlation in Research and Teaching、2018

中村靖子、感情起動のプログラム—神経科学的方法論を参照して、シンポジウム「感情：表現と操作」、日本独文学会秋季研究発表会、2018

Akira Ichikawa、Takarazuka-Revue und Georg Kaisers Zwei Krawatten、International Conference Universität Rom、2017

葉柳和則、テキストとしての「文化教書」(1938) ナチス時代のスイスにおける「精神的国土防衛」運動の理路、日本国際文化学会、2017

Hiroko Masumoto、Das Bild des Wissenschaftlers in den Werken von Brecht, Frisch und Dürrenmatt、クザース大学・神戸大学共催国際シンポジウム“Natur, Geist, Schicksal”、2017

中村靖子、感情を創成する 文学と歴史、日本感情心理学会セミナー「感情と歴史」、2017

Akira Ichikawa、“Mann ist Mann” und Kabuki、7th IBS Symposium: “Recycling Brecht” International Brecht Society(IBS)、2017

Hiroko Masumoto、Multiculturalism in Switzerland and “Spiritual National Defense” in the 1940s、Collaborative Workshop between Trier University and Kobe University “Space and Time in Modern Civilization”、2016

葉柳和則、精神的国土防衛の「マグナ・カルタ」、あるいはスイス政府「文化教書」の理路、日本独文学会西日本支部第 68 回総会・研究発表会、2016

〔図書〕(計 3 件)

中村靖子、春風社、非在の場を拓く、2019、490

市川明、松本工房、アンドラ 十二景の戯曲、2018、440

葉柳和則・市川明・Werner Wüthrich・中村靖子・増本浩子、日本独文学会、チューリヒ劇場と文化の政治、2016、1-44 & 63-99

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：市川 明

ローマ字氏名：ICHIKAWA, Akira

所属研究機関名：大阪大学

部局名：文学研究科

職名：名誉教授

研究者番号(8桁): 00151465

研究分担者氏名：増本 浩子

ローマ字氏名：MASUMOTO, Hiroko

所属研究機関名：神戸大学

部局名：人文学研究科

職名：教授

研究者番号(8桁): 10199713

研究分担者氏名：中村 靖子

ローマ字氏名：NAKAMURA, Yasuko

所属研究機関名：名古屋大学

部局名：人文学研究科

職名：教授

研究者番号(8桁): 70262483

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。